

編輯顧問  
**倉橋惣三**  
と  
**キンダーブック**

ツリーズムへのいざない  
地球が小さくなり始めた時代

浜口順子

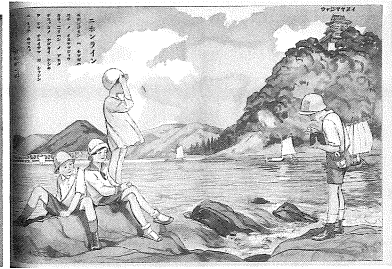
「景色の巻」(第三輯第五巻 一九三〇(昭和五)年八月)

表紙は富士山。二人の女兒がその雄姿に歓声を上げる背後で、男児は背中を丸めて一生懸命スケッチをし、はにかむように読者の方を振り返っている(画像1、絵は岡本帰一)。「きれい! 大きいなあ! などと喜ぶのもいいけれど、細部もよく見ましよう」というメッセージが、観察絵本キンダーブックらしく伝わってくる。

保育者・保護者向けの解説ページ(折り込み)の散逸している巻が多いが、フリーベル館本社で閲覧したこの巻の原本には残っていた。その「絵の説明」には、「富士山はかけがえのない日本の代表的風景であるばかりでなく、その崇高、優美、風雅な姿態は世界にもならぶものなき自然界の象徴美であります。我々は富士を持つ一事のみによっても、日本の自然を世界に誇って可なるのであります。」とある(執筆者は不詳)。

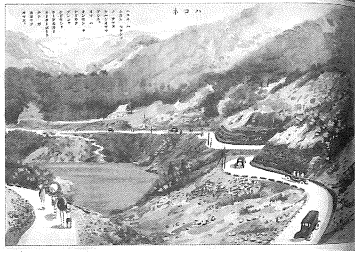


▲画像1 「景色の巻」表紙  
(昭和5年8月)



▲画像2 「ニホンライン」

「日本ライン」のページ(画像2)。犬山城を山の頂に望み、帆掛け舟の浮かぶ木曾川沿い。「ニホンラインハ キソガハスデノ イヌヤマジャウカラ、ニリハンノ アヒダデス。コノナダカイケシキヲ イマ オニイサマガ シヤシンニ トツテイマス」。ファインダーを上からのぞき込む方式の昔風の写真機ではあるが、「子どもがカメラを? もうこの時代に?」と思う方もいるのでは? 筆者も含め、この時代かなり技術文明は発達していたと認識を新たにする必要がある。



▲画像3 「ハコネ」

この点は、「箱根」のページでも明らかに(画像3)。「ハコネハ ムガシ セキシノアッタ ケハシイヤマデシタ。イマハ オンセンデナダカク デンシャ ジドウシャ ケーブルカー モーターボート ナドガカヨッテイマス」とある。この昭和初期に、交通機関はかなり発達していたことが、この文章からもうかがわれる。各地の観光地を訪れることは日常になりつつあったのだ。そのほかに、松島、天橋立、宮島、雲仙岳、日本アルプス、華厳の滝(画像4、現

在はこれほどそばに寄れず、展望台から望む)、室戸、十和田湖、長瀬、カムイコタン、金剛山、耶馬溪、日月潭(台湾の湖)のページがある。



▲画像4 「ケゴンノタキ」



▲画像5 「世界一周の巻」表紙  
(昭和6年3月)

者不明)。表紙(画像5、絵は藤澤龍雄)は、たくさんテープを甲板に受け、六歳ぐらいだろうか、コートと帽子姿のちよつと緊張した面持ちの太郎と花子が、港を今や出発しようとするところ。世界一周ストーリーの始まりを予感させる。まずは上海、そしてコロンボ、カイロ、パリ、ベルリン、ベルン、サン・ペテロ(バチカン)、モスクワ、ストックホルム、オランダ、ロンドン、ニューヨーク、カリフォルニア、ホノルルを経て、日本へ帰還するという西航路をとっている。

この昭和初期には、児童向けの文庫に「旅」もの、「世界」ものが入

当時、海外からの観光客を招こうとする動きも盛んになっていた。子どもの情操教育、地理教育にとどまらない、国内観光へのまなざしは、次のような解説文に読み取ることができている。「近年日本の自然美はますます外人の認むる所となり、観光客は年々増加の傾向を続いています。貿易外収支としてそれは我が国の国際貸借バランスの改善の上に有利なことが察せられて政府に於いても最近『観光局』を創設し、大いに外人誘致策を講ずる計画であります。」

## 「世界一周の巻」(第三輯第十二巻 一九三二(昭和六)年三月)

この巻は、国内編だった前掲「景色の巻」の世界編にあたる。「景色の巻」は、いろいろな景勝地が紹介されているだけで全体的な統一感に欠けていた。この「世界一周の巻」は違う。序文に、「幼児太郎と花子とを配して欧米漫遊の形式を以てし、単なる都市名所の羅列でなく、まず横浜出帆の欧州航路をとって、各国の風物に接せしめようと企てました。」とある(執筆

ることが多かったようである。A R S（アルス）という北原鐵雄（白秋の弟）が創立した出版社から、全集形式で日本児童文庫が発刊されており、『日本の旅』（田中啓爾著）と『日本と世界』（鶴見祐輔著）とが昭和四年に、『世界の旅』（田中啓爾著）がその翌年に刊行された。同じ時期に文藝春秋社から「小学生全集」が編まれ、その上級用第五九巻に『世界一周旅行』がある。その父兄向けの「はしがき」によると、当時の小学校の教育課程では、世界地理は「尋常五、六年で教える地理書の中の、六年用の半分ばかりがあるだけでありまして、その他には、全く皆無の有様」であつたという。しかし一方、「交通機関の利用、名所旧跡の高速度的訪問」は人々の耳目を集めやすかつた時代だつたようであり、そのような方面の関心を満たすような内容にはしていないと、わざわざ断り書きされている。

「最初の世界一周旅行隊、マゼラン探検隊は、西暦一五一九年から三年を費やしてようやく世界を一周したのでありますが、一九世紀になりますと、急に速度を増しまして、（中略）二十世紀に入りましてからは、六十日、五十四日、四十日、三十九日、三十五日、三十三日、二十八日、二十三日とだんだんと縮まつております。それは、勿論交通機関の発達と、新しい通路の開発、すなわち山の道、海の道のほかに、空の道まで開けたこと——によるのでありまして、学者の『地球がだんだん小さくなる』と言っているのは、すなわちこのことを意味しているのであります。」（小学生全集編輯部）

昭和初期のこのころのことを、戦後生まれの私などは、どうしても、第二次世界大戦の敗戦からさかのぼって、「意外に発達していたんだな」と考えやすい。しかし蒸気機関車はもとより地下鉄の開通、国内定期航空路開設、一九二九年にはドイツの飛行船飛来を受け、距離



▲画像6 「カイロノミヅウリ」

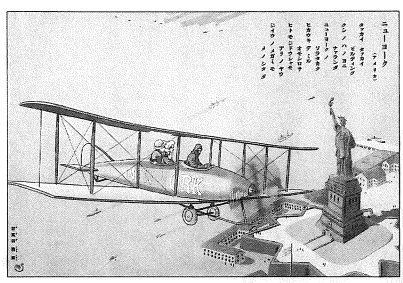
それまでの官僚や国費留学生に代わり積極的に欧米を目指す。こうして平成のいまに通じる大衆によるツーリズム（海外旅行）の幕が開いた。」前置きが長くなったが、キンダーブックの「世界一周の巻」。七五調の文章が面白い「カイロの水売り」（画像6）。「ミヅウリダイサン ノンキ ダナ カイロノマチノ マンナカデ アツイヒナカモ ブラブラト ミヅウリダイサン ミヅヲウル セナカニシヨッタ カハブクロ チヨイトヒネツテ ミヅヲダス ミヅウリダイサン スズシカロ」——炎熱の町中で水売る人を「のんき」とうたう雰囲気は、「月の沙漠」（佐藤マサヲ 詞 一九二三年）のロマン主義を彷彿（ほうふつ）とさせる。

感覚は相当縮まってきただろうし、ラジオや多くの児童向け雑誌を通じて、遠くの間所をより間近に感じながら、「未知の地へのあこがれ」は素朴に、子どもだけでなく庶民の間にも芽生えていたのであろう。

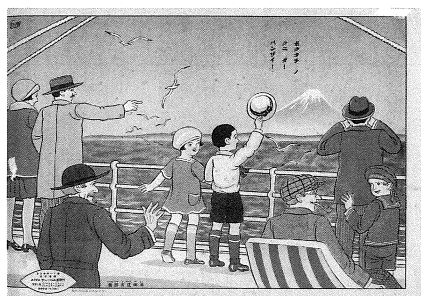
昭和初期の旅行記を研究した田村研平は、この時代を「ベル・エポック（よき時代）」と呼ぶ。「旅行」として例外ではない。明治初期の一八七〇年代、スエズ運河の開通（一八六九（明治二）年）で、世界一周ツアーが始まった。その後、第一次大戦中にパナマ運河が開通（一九一四（大正三）年）、続いてシベリア鉄道が全線開通（一部は一九〇四（明治三七）年、全線は一九一六（大正五）年）し、地球が一举に短縮された結果、大戦後は世界ツアーが盛んになり、日本へも外国人観光客が大勢やってくる。距離が物理的な単位でなく日数や時間に置き換えられるスピード時代の到来だ。続く昭和に入るや、財力や進取の気性に富む大衆エリートが、



▲「フノ スtockホルム」  
（『世界一周の巻』より）



▲「ニューヨーク」  
（『世界一周の巻』より）



▲「ボクタチ ノ クニ ダ！ バンザイ！」  
（『世界一周の巻』より）

「モスクワ」（画像7）のページには、次のような説明がある。「ここはモスクワの赤い広場です。左に見える建物はレーニンという、この国の偉い人のお墓です。ロシアの子どもは皆お仕事をしなければなりません。」（解説には、「幼児も児童も共同的習性を養わせるために、必ず職業を持って労働に従事することは周知の事実であります」とある。）

——続く——

（引用文は現代仮名遣い等に直してあります。）

参考文献 田村研平 『日本人は何を見たか？ 海外旅行記の昭和史』  
社会思想社 一九九五年 p5

（お茶の水女子大学大学院）



▲画像7 「モスクワ」